

令和4年度

「運営に関する計画」

最終評価

咲洲みなみ小中一貫校

大阪市立南港みなみ小学校・大阪市立南港南中学校

令和5年3月

咲洲みなみ小中一貫校 大阪市立南港南中学校・大阪市立南港みなみ小学校
令和 4 年度 運営に関する計画・自己評価（総括シート）

1 学校運営の中期目標

現状と課題

● 生活指導上の現状と課題

- ・授業は静かで児童・生徒の態度も真面目である。校則を正しく守る児童・生徒がほとんどで規範意識も高い。（令和 3 年度学校評価アンケートにて「校則を守っている」の肯定的回答が小学生低学年 90.0% 高学年 88.0% 中学生 95.0% である。加えて記録に残る問題行動件数も 10 件未満である）。
- ・新たに不登校となる児童・生徒の割合も低下し、改善傾向である。

（令和 3 年度は中学校 0.9%（221 名中 2 名）、小学校 0.3%（305 名中 1 名）

● 学力体力の現状と課題

- ・学力向上の取り組みでは、各テストの結果は大阪市平均を下回っており課題が大きい。小学校学力経年調査・中学校チャレンジテストにおける令和 3 年度の標準化得点は 3 年 99.2 4 年 98.9 5 年 100.8 6 年 95.6 7 年 98.9 8 年 99.3 9 年 94.8 である。
- ・授業は静かに行われており、教員が創意工夫をいかんなく発揮できる現状である。全教員が I C T を積極的に活用し、児童・生徒の学習意欲を引き出し、主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）を推進している。
- ・体力向上について、緑豊かで自然に触れあうことが多く、恵まれた教育環境である。9 年間を通じた体力向上に取り組んでいるが、令和 3 年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査において全国平均を上回っている項目は小学校・中学校とも半数以下である。

● その他の現状と課題

- ・学校評価アンケートにおいて「自分には良いところがある」の質問に対する肯定的回答は小学生約 83% に対し中学生は約 58%、さらに「学校に行くのが楽しい」への肯定的回答は小学生約 84% に対し中学生は約 67% と、小学生は全国平均レベルであるが中学生について自己肯定感や自己有用感が低く、これらを高めるような教育活動の工夫が必要である。
- ・大阪市で 5 校目の施設一体型小中一貫校として本校の特色をこれまで以上に打ち出し、全市に発信していく必要がある。

中期目標

【安全・安心な教育の推進】

○令和 7 年度の学校評価アンケートで「学校に行くのは楽しいと思いますか」の質問に対して、肯定的に回答する児童生徒の割合を小学校 85%、中学校 75%以上とする。

○令和 7 年度の学校評価アンケートで「自分にはよいところがあると思いますか」の質問に対して、肯定的に答える児童生徒の割合を、小学校 90%、中学校 70%以上とする。

【未来を切り拓く学力・体力の向上】

○小学校学力経年調査・中学校チャレンジテストにおいての令和 7 年度標準化得点を 3 年～9 年の全学年 100 以上とする。

○令和 7 年度の全国体力・運動能力、運動習慣等調査において、8 項目すべてで全国平均を上回る。

【学びを支える教育環境の充実】

○令和 7 年度の学校評価アンケートで「タブレットや PC を取り扱うことは楽しい」の質問に対して、肯定的に答える児童生徒の割合を小学校 96%、中学校 90%以上とする。

○令和 7 年度において、ゆとりの日については月 2 回以上設定する。学校閉序日については、夏季休業期間中は 4 日以上、夏季休業期間以外の休業期間においては 3 日以上設定する。

○令和 7 年度末で年間図書館を利用した児童生徒の延べ人数を小学校 10000 人、中学校 1000 人以上とする。

○令和 7 年度まで保護者アンケートの「学校は家庭・地域との連携を密にとっているか」の項目について、肯定的に答える保護者の割合を年々増加させる。

2 中期目標の達成に向けた年度目標（全市共通目標を含む）

【安全・安心な教育の推進】

全市共通目標（小・中学校）

- 小学校学力経年調査・中学校年度末の校内調査における「いじめは、どんな理由があつてもいけないことだと思いますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する児童生徒の割合を小学校93%以上（現在87.5）中学校85%（現在75.4）以上にする。
- 年度末の校内調査において、不登校児童生徒の在籍比率を前年度より減少させる。
- 年度末の校内調査において、前年度不登校児童生徒の改善の割合を増加させる。

学校園の年度目標

- 年度末の校内調査において、学校で認知したいじめについて解消した割合を100%にする。

【未来を切り拓く学力・体力の向上】

全市共通目標（小・中学校）

- 小学校学力経年調査・中学校年度末の校内調査における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する児童生徒の割合を小学校は40%、中学校は45%以上（現在小36.9、中41.0）にする。
- 小学校学力経年調査・中学校チャレンジテストにおける国語および算数・数学の平均正答率の対市比及び対府比を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より1ポイント向上させる。（現在は年々下がっている）
- 小学校学力経年調査における「外国語（英語）の勉強は好きですか」に対して、肯定的に回答する児童の割合を80%以上にする。（現在71.9）
- 大阪市英語力調査におけるC E F R A 1 レベル相当以上の英語力を有する中学3年生の割合(4技能)を50%以上にする。（現在34%）
- 小学校学力経年調査・中学校年度末の校内調査における「運動（体を動かす遊びを含む）やスポーツをすることは好きですか」に対して、最も肯定的な「好き」を回答する児童生徒の割合を小学校・中学校とも65%以上にする。（現在小学校59%、中学校54%）

学校園の年度目標

- 家庭学習の習慣定着をめざして宿題の工夫、e ラーニング、自習ノート等の取り組みを通して、学校評価アンケートで「家庭学習が習慣になっている」という肯定的回答を70%以上とする。

【学びを支える教育環境の充実】

全市共通目標（小・中学校）

- 学校評価アンケートで「タブレットやPCを取り扱うことは楽しい」の質問に対して、肯定的に答える児童生徒の割合を小学校90%、中学校85%以上とする。
- ゆとりの日については月1回以上設定する。学校閉序日については、夏季休業期間中は3日以上、夏季休業期間以外の休業期間においては2日以上設定する。
- 令和4年度末で年間図書館を利用した児童生徒の延べ人数を小学校9700人、中学校900人以上とする。

学校園の年度目標

- 学校生活において、児童生徒が毎日1回はタブレットやPCに触れる機会をつくる。
- 学校ホームページのアクセス数を年間80,000件以上とし、保護者地域への情報発信に努める。

3 本年度の自己評価結果の総括

- いじめ・不登校への取組として、様々な特色ある授業や行事等を通して、児童生徒の人間性を醸成してきた。「いじめは許されない」という認識が児童生徒の中にも十分浸透しており、人権感覚が培われていると考える。このような未然防止のみならず、早期発見や適切な初期対応ができるよう、定期的な情報共有や生活指導研修を重ねてきたことも「安全で安心な学校」づくりに大きく寄与していると思われる。学校が児童生徒の「居場所」となるよう、今後も魅力的な授業や行事の展開を図っていく。
- 対話的な学習の推進を図るために、授業研究を進め授業改善に取り組んできた結果、児童生徒が仲間と対話し考えを深める学習の流れが整ってきた。一方で、基礎学力の向上については、家庭学習の定着と合わせて課題が残る結果となった。英語力の向上と同様、児童生徒の学習意欲をいかに喚起するかに着目しながら、今後も継続したアプローチが必要である。体力向上においては、「運動能力」だけにとらわれることなく、「健康」を含めた「体力」の向上に向けて、運動や食への興味関心に焦点を当てて取組を行ってきた。中学校の体力・運動能力調査の結果が改善傾向にあることからも、引き続き、小中一貫校として積み上げのある取組を進めていく。
- 一人一台端末の活用と読書の推進については、環境整備や活用方法の工夫を進めてきたが、目標にはわずかに届かなかった。端末活用の楽しさや読書への興味関心は、児童生徒の中で広がってきてるので、より効果的な利用方法や啓発活動を模索しながら、現在の取組を継続させていきたい。働き方改革の推進に関しては、教職員のワークライフバランスの調和を図っているが、結果として月間時間外勤務の時間数には表れなかった。業務の均等化や教育DXによる効率化のみならず、行事の精選や簡素化等も視野に、引き続き検討を進めていく必要がある。家庭・地域との連携については、積極的な情報発信と地域行事等への参加により、本校教育活動に一定の理解を得ることができている。

(様式 2)

咲洲みなみ小中一貫校 大阪市立南港南中学校・大阪市立南港みなみ小学校
令和 4 年度 運営に関する計画・自己評価（目標別シート）

評価基準 A : 目標を上回って達成した	B : 目標どおりに達成した
C : 取り組んだが目標を達成できなかった	D : ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標	達成状況
<p>【最重要目標 1 安全・安心な教育の推進】</p> <p>全市共通目標（小・中学校）</p> <p>○小学校学力経年調査・中学校年度末の校内調査における「いじめは、どんな理由があつてもいけないことだと思いますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する児童生徒の割合を小学校は93%以上（現在87.5）中学校は85%（現在75.4）以上にする。</p> <p>○年度末の校内調査において、不登校児童生徒の在籍比率を前年度より減少させる。</p> <p>○年度末の校内調査において、前年度不登校児童生徒の改善の割合を増加させる。</p>	<p>小 B</p> <p>中 B</p>
<p>学校の年度目標</p> <p>○年度末の校内調査において、学校で認知したいじめについて解消した割合を 100%にする。</p>	

年度目標の達成に向けた取組内容、取組の進捗状況を測る指標	進捗状況
<p>取組内容①【1 安全・安心な教育環境の実現】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全学年、通常授業や総合特活等の特色ある授業、芸術鑑賞・社会体験等を通じて児童生徒の情操教育に力を入れ、いじめ・不登校の未然防止に努める。 	<p>小 B</p>
<p>指標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学校学力経年調査・中学校年度末の校内調査における「いじめは、どんな理由があつてもいけないことだと思いますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する児童生徒の割合を小学校は 93%以上、中学校は 85%以上にする。 	<p>中 B</p>

<p>取組内容②【2 豊かな心の育成】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・校内全体でいじめ・不登校の情報共有化を図る。 ・想定される事故を未然に防ぐ対策を行い、安心して学べる環境の充実を図る。 	<p>小 B</p>
<p>指標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学期に 1 回、いじめ不登校対策委員会を行う。 	<p>中 B</p>

年度目標の達成状況や取組の進捗状況の結果と分析
<ul style="list-style-type: none"> ● 「いじめは、どんな理由があつてもいけないことだと思いますか」の質問に対し、最も肯定的な回答を示した児童生徒の割合は、小学校で約 79%（小学校学力経年調査）、中学校で約 79%（後期学校評価アンケート）となった。小中いずれも目標を下回る結果となつたが、「肯定的な回答」全体としては、小学校で約 95%、中学校で約 93%（いずれも同調査）と高値を示していることからも、次年度の指標を見直す契機としたい。年 3 回の「選択授業」や魅力ある学校行事を計画的に進めることで、児童生徒の「感じ方」や「人間性」の醸成を図ってきたが、今後も継続して取り組んでいく必要があると思われる。

- いじめ不登校対策委員会については、事案発生時等に適時適切に参集することに加え、生活指導連絡会を月1回開いて情報共有を図ることができた。また、定例会として、1・2学期に1回ずつ（7/15、12/23）開催し、適切な対応等についてのみならず、未然防止に向けた取り組みについて検討することができた。

次年度への改善点

- 今後も、教育活動のあらゆる場面で児童生徒の人権感覚を培い、いじめ・不登校の未然防止に努めつつ、早期発見や適切な初期対応ができるよう、より効果的な校内研修の在り方や内容、方法等を検討していく。

(様式 2)

咲洲みなみ小中一貫校 大阪市立南港南中学校・大阪市立南港みなみ小学校
令和 4 年度 運営に関する計画・自己評価（目標別シート）

評価基準 A : 目標を上回って達成した	B : 目標どおりに達成した
C : 取り組んだが目標を達成できなかった	D : ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標	達成状況
【最重要目標 2 未来を切り拓く学力・体力の向上】	
全市共通目標（小学校）	
○小学校学力経年調査・中学校年度末の校内調査における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する児童生徒の割合を小学校は40%、中学校は45%以上（現在小36.9、中41.0）にする。	小 B
○小学校学力経年調査・中学校チャレンジテストにおける国語および算数・数学の平均正答率の対市比及び対府比を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より1ポイント向上させる。（現在は年々下がっている）	中 B
○小学校学力経年調査における「外国語（英語）の勉強は好きですか」に対して、肯定的に回答する児童の割合を80%以上にする。（現在71.9）	
○大阪市英語力調査における C E F R A 1 レベル相当以上の英語力を有する中学 3 年生の割合(4 技能)を50%以上にする。（現在34%）	
○小学校学力経年調査・中学校年度末の校内調査におけるに「運動（体を動かす遊びを含む）やスポーツをすることは好きですか」に対して、最も肯定的な「好き」を回答する児童生徒の割合を小学校・中学校とも65%以上にする。（現在小学校59%、中学校54%）	
学校の年度目標	
○家庭学習の習慣定着をめざして宿題の工夫、e ラーニング、自習ノート等の取り組みを通し、学校評価アンケートで「家庭学習が習慣になっている」という肯定的回答を70%以上とする。	

年度目標の達成に向けた取組内容、取組の進捗状況を測る指標	進捗状況
取組内容①【4 小学校 誰一人取り残さない学力の向上】 ・毎日 I C T の活用やペア・グループ学習を取り入れた授業を行う。 ・漢字検定の準備や実施を通して、国語の基礎学力の向上に努める。 ・年間 6 回以上の算数科における研究授業を行い、教職員の授業力向上に努める。 ・英語モジュール授業を週 3 日以上行い、児童の外国語への興味関心を高める。 ・宿題等の工夫により家庭学習の定着を図る。	小 C
指標 ・小学校学力経年調査における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する児童を 40%以上 にする。 ・小学校学力経年調査における国語の対市比を、同一母集団において経年的に比較し、	

いずれの学年も前年度より向上させる。

- ・小学校学力経年調査における算数の対市比を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より向上させる。
- ・小学校学力経年調査における「外国語（英語）の勉強は好きですか」に対して、肯定的に回答する児童の割合を80%以上にする。
- ・学校評価アンケートで「家庭学習が習慣になっている」という肯定的回答を70%以上とする。

取組内容②【4 中学校 誰一人取り残さない学力の向上】

- ・各教科において、ICTの活用やグループ学習を取り入れた「主体的・対話的で深い学び」の授業を行う。

国語 グループ学習を学期に1回以上取り入れ、自分の考えを伝える力や友だちの意見を聞いて考えを深める力を養う授業を行う。

社会 毎時間ICT機器を活用し、生徒の興味・関心を高める授業を行う。

数学 学び合い活動を70%以上実施する。

理科 映像の提示や調べ学習などICT機器を週2回以上用いて授業を行う。

英語 英語スピーチやプレゼンテーションを一人一台端末で記録することで評価やフィードバックに活用する。

授業中の発問や取り組みの際にペアやグループで協力して考えることでペア・サポートを促す。

美術 各学年でPC、タブレット、投影機などのICT機器を各学期に5回以上使用し、視覚的にわかりやすく、関心を持てるように授業を行う。

技術 実習授業において、各学年5回以上ICT機器を用いる。

家庭 実習授業において各学年3回以上ICT機器を活用する。

音楽 歌詞の内容を深め、表現工夫を生かすために、グループワークを単元ごとに用いる。

リズム作りや曲作りなどグループワークを各学期に行う。

タブレットを用いて作曲者の背景を調べるなど自主的に教材内容を学ぶようにする。

保健体育 自身の動きを撮影したり、模範となる動きを映像で提示したりするなどし、興味・関心を深め、技能の向上を目指す。また、フィードバックなどにも使用し、深い学びにつなげる。

- ・2学期に研究授業週間を設け、相互の授業参観・研究協議を行い、教職員の授業力向上に努める。
- ・全校生徒が受験する英語検定の準備や実施を通して、英語の基礎学力向上に努める。
- ・宿題等の工夫により家庭学習の定着を図る

指標

- ・中学校年度末の校内調査における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する児童生徒の割合を45%以上にする。
- ・中学校チャレンジテストにおける国語および数学の平均正答率の対市比を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より1ポイント向上させる。
- ・英語検定4級以上の合格率を65%以上とする。
- ・学校評価アンケートで「家庭学習が習慣になっている」という肯定的回答を70%以上とする。

中B

取組内容③【5 健やかな体の育成】

- ・体力の向上に向け、工夫した保健体育の授業を展開する。
- ・給食指導を通じて、食育に関して興味関心を高める。

指標

- ・保健体育授業の導入での準備運動・トレーニングに時間かけるとともに、年間5時間以上「キンボール」などのニュースポーツを行い、スポーツ全般に対する興味関心を高める。
- ・1～6年生で各学年1回以上の栄養教育指導を行い、健康や食育に関する意識を高める。
- ・給食委員会を中心に年間6回以上「残食ゼロ週間」を行い、SDGsにも通じる環境問題の意識向上に努める。

小A

中B

年度目標の達成状況や取組の進捗状況の結果と分析

- 小学校の学力向上において、学力経年調査では、「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができますか」の問い合わせに対して、最も肯定的な「思う」と答えた児童の割合は約37%と目標にわずかに届かなかった。平均正答率については、対市比の同一母集団比較において、国語・算数ともに4～6年のいずれの学年でも前年度を下回った（4年国語98.8→97.2、5年国語97.7→95.3、6年国語100.7→99.6、4年算数99.6→97.9、5年算数99.8→96.9、6年算数98.4→98.0）。仲間との対話的な学習や国語の基礎学力定着、算数科の研究授業（全6回）による授業改善、ICTを活用した学習の推進など、新型コロナウイルスの感染対策を講じながら、発達段階に応じて各学年で適切に進めてきたが、学力の向上につながらなかった。また、「外国語（英語）の勉強は好きですか」の問い合わせに対して肯定的な回答を示した児童の割合は、約68%と目標を大きく下回った。英語に対する興味関心を高めていく指導方法について検討していく必要がある。家庭学習の定着については、後期学校評価アンケートの「家庭学習が習慣になっている」という問い合わせに対し、約78%の児童が肯定的な回答を示し、目標を達成することができた。
- 中学校の学力向上において、後期学校評価アンケートでは、「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができますか」の問い合わせに対して、最も肯定的な「思う」と答えた生徒の割合は、約45%と目標を達成した。中学校チャレンジテストの結果において、国語および数学の平均正答率の対府比を同一母集団（8・9年）の前年度と比較すると、8年は1ポイント以上向上したものの、9年はほぼ同値もしくは低下する結果（8年国語89.4→91.8、8年数学100.5→104.3、9年国語91.3→91.1、9年数学98.5→93.9）となった。「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、生徒の実態に合わせながら各教科で取組をさらに進めていく必要がある。英語力向上に向けた英検受験においては、4級以上の合格率が約54%（2級14.3%、準2級50.0%、3級48.0%、4級76.2%、5級66.7%）と目標を大きく下回る結果となった。適切な目標設定も含め、取り組み方を検討していく必要があると思われる。家庭学習の定着については、後期学校評価アンケートにおいて「家庭学習が習慣になっている」と肯定的に答えた生徒は約49%と、目標を大きく下回る結果となった。感染状況の拡大により学校での学習環境が安定しない時期があったことも一要因と考えられる。
- 中学校保健体育科の授業では、体力向上に加えて、運動意欲の向上を図るための体つくり運動に取り組んだ。さらに、後期には、パラスポーツやマイナースポーツを含むニュースポーツを6時間実施した。生徒の運動意欲を喚起し、生涯スポーツにつなげる一助

とすることができたと考える。小学校での食育指導は、各学年2回（全12回）実施することができた。授業のみならず、各学級に指導資料を配付するなど、児童への意識づけも年間を通して行うことができた。また、残食を減らす「もりもり食べよう週間」については、6月から毎月（全9回）実施し、児童生徒の啓発に努めることができた。

次年度への改善点

- 家庭学習の定着について、児童生徒にとっての必要感や授業とのつながり、適切な分量等にも着目しながら、引き続き習慣の定着を図っていく必要がある。
- 体力向上については、小学校からの積み上げを念頭に、児童生徒の運動意欲に働きかけ運動習慣の定着を図っていく。加えて、食に関する指導を計画通り進めていくことで、自らの食や体力等に対する関心をもたせていく。

咲洲みなみ小中一貫校 大阪市立南港南中学校・大阪市立南港みなみ小学校

令和 4 年度 運営に関する計画・自己評価（目標別シート）

評価基準 A : 目標を上回って達成した	B : 目標どおりに達成した
C : 取り組んだが目標を達成できなかった	D : ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標	達成状況
【最重要目標 3 学びを支える教育環境の充実】	
全市共通目標（小学校）	
<p>【ICTの活用に関する目標を設定する】</p> <p>○学校評価アンケートで「タブレットやPCを取り扱うことは楽しい」の質問に対して肯定的に答える児童生徒の割合を小学校 90%、中学校 87%以上とする。</p> <p>【教職員の働き方改革に関する目標を設定する】</p> <p>○ゆとりの日については月 1 回以上設定する。学校閉庁日については、夏季休業期間中 3 日以上、夏季休業期間以外の休業期間においては 2 日以上設定する。</p>	小 B 中 B
学校の年度目標	
<p>○学校生活において、児童生徒が毎日 1 回はタブレットやPCに触れる機会をつくる。</p> <p>○学校ホームページのアクセス数を年間 80,000 件以上とし、保護者地域への情報発信に努める。</p>	

年度目標の達成に向けた取組内容、取組の進捗状況を測る指標	進捗状況
取組内容①【6 教育DX（デジタルトランスフォーメーション）の推進】 ・ICT教育の活性化を目指し、一人一台端末を教材として活用する機会を増やし、プログラミング教育の基礎を培う。	小 B 中 C
指標 ・学校評価アンケートにおける「タブレットやPCを取り扱うことは楽しい」の肯定的回答の割合を小学校 90%、中学校 87%以上とする。	
取組内容②【7 人材の確保・育成としなやかな組織づくり】 ・校務負担の均等化や仕事の効率化の推進、プレイヤーズファーストの徹底等により、教職員の長時間勤務減少に取り組む。	小 C 中 C
指標 ・教職員の月間時間外勤務実績を前年より減少させる（令和 3 年度小学校約 27 時間、中学校約 51 時間）	
取組内容③【8 生涯学習の支援】 ・図書委員会の活動を通じて、全校あげて読書活動の推進に努める。	小 B 中 B
指標 ・学校評価アンケートで「本を読むことが好き」の質問に対して肯定的に答える児童生徒の割合を小学校 85%、中学校 60%以上とする。（令和 3 年度小学校 81%、中学校 50%）	

<p>取組内容④【9 家庭・地域と連携・協働した教育の推進】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学級だより、学年だより、学校だより等を積極的に発行し、学校からの情報発信に努める。 ・コロナ禍の中、可能な範囲で地域行事や幼稚園・福祉施設との交流イベントに参加する。 <p>指標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者アンケートの「学校は家庭・地域との連携を密にとっているか」の項目について、肯定的に答える保護者の割合を 50%以上とする。 	<p>小 B 中 B</p>
年度目標の達成状況や取組の進捗状況の結果と分析	
<ul style="list-style-type: none"> ● 一人一台端末の活用について、後期学校評価アンケートでは、「タブレットや PC を取り扱うことは楽しい」と肯定的に答える児童生徒が、小学校で約 93%と目標を上回ったものの、中学校では約 79%と目標を大きく下回る結果となった。家庭での利用も含め、児童生徒が学習の「道具」として当たり前に使うことができるよう、効果的な活用方法について検討を進める。 ● 長時間勤務の解消について、4～2月の平均月間時間外勤務実績は、小学校で約 29 時間、中学校で約 50 時間となっており、前年度と比べ小学校で増加、中学校でわずかに減少した。年度当初や大きな行事の時期に増加しており、行事等の内容も含めて取り組み方を検討していく必要がある。ゆとりの日については毎月 1 回、学校閉庁日については夏季休業中 4 日、冬季休業中 2 日設定しており、教職員のワークライフバランスの調和を図ることができた。 ● 読書について、後期学校評価アンケートでは、「本を読むことが好き」と答える児童生徒が、小学校では約 83%、中学校では約 58%と昨年度を上回っているものの、目標にわずかに届かなかった。小学校では、図書室を自由に利用できるようにしたことで児童が来室する機会が増えたと考えられる。小中ともに、司書を中心とした読書啓発の取り組みを今後も継続していく。 ● 学校・家庭・地域の連携について、後期保護者アンケートでは、「学校は家庭・地域との連携を密にとっているか」の質問に対して、小中合わせて約 68%の保護者が肯定的な回答を示しており、学校の教育活動に一定の理解と協力を得られていると考えられる。また、吹奏楽部（小学生を含む）によるイベントや施設での演奏など、地域との積極的な関わりも持つことができた。今後も、新型コロナウイルス感染症の拡大状況を注視しながら、地域行事や各種交流イベントに参加しつつ、積極的な情報発信を継続していく。 	
次年度への改善点	
<ul style="list-style-type: none"> ● ICT の活用については、家庭学習の定着とも絡めながら進めていくとともに、メディア・リテラシーについても発達段階に応じて適切に指導していく必要がある。 ● 時間外勤務の削減に向けて、業務の効率について再度見直し、情報化やスリム化を図る。また、教職員が日々の退勤時間や毎月の超勤時間を意識できるようにしていく。 	